

マミー

ブレンダン・オキャロル著 伊達淳訳 (白水社 2003.2)

この作品は一言でいうと、「母親奮闘記」。1967年のアイルランドのダブリンを舞台として、実際に今もこの地方の女性の特徴であるようですが、強くて愛情あふれる女性、アグネス・ブラウンが主人公の物語です。交通事故で夫を亡くした、という状況から始まるこの物語は、深く悲しい気持ちを胸にしまって、幼い7人の子供を必死に育てるアグネスの、涙とユーモアと、何よりも心にしみ入るような優しさと愛情で満ちあふれています。ダブリンの下町の雰囲気や、市場の活気ある風景、登場人物たちの生き生きとした生活が、目に浮かぶような描写で描かれています。失意のどん底に落とされていてもおかしくないはずなのに、へこたれず自分の思う道を突き進み、どんなことが起こってもアグネスは子供たちを信じ、しっかりと強い気持ちで包みこんで、たくましい。だけど、血眼になって生きているわけでもなく、親友や子供たちと過ごす時間をおしゃべりに笑ったり、憧れている歌手を夢見たりと、日々の生活の中で喜びを見出し楽しんで生きています。

強く生きていこうとする母の背中が、幼い子供たちの目にもちゃんと映っていた証のひとつとして、夫の葬儀の夜、14歳の長男がアグネスに「大丈夫だよ、ママ。ぼくがいるから」とそっと声をかけ、父に代わって自分が一家の大黒柱となることを決意し母親想いの働き者へと成長していきます。決して裕福ではない生活の中でも、嫉

妬や失望、悲壮感にさいなまれることなく、互いに思いやり支えあって精一杯生きている様子はとても魅力的で、忘れてしまいがちな優しい気持ち、こころの豊かさとは何か、ということを感じさせてくれます。一見、粗けずりて手厳しい印象を受けることばであっても、それは愛する者たちを信じ、守ろうとする意思、強さに裏付けられた思いやりに

満ちたものであり、彼女たちの行動すべてが相手を想う気持ちの現れとなっていることを感じることができます。

そして締めくくりには、一生懸命生きていれば、いつか必ず幸運なことが起こり得る!ということを感じさせてくれて幕を閉じ、どこまでも前向きな気持ちになれる一冊だと思います。

(研究資料室 相原玲子)



モチ論

(エイチエス 2006.11)

今、自分の将来に迷いを抱えている、これといった目標を見出せない、そんな人に読んでもらいたい一冊。それがこの「モチ論」である。

一風変わったタイトルとシンプルな表紙のこの本の中には、地元北海道を中心にさまざまな分野で活躍する22人のインタビューが掲載されている。3度の五輪で天国と地獄をみた銅メダリスト。余市に100坪のヘアサロンを開いたオーナー。35歳で空手を初め、世界4位になった漁師。「考える野球」をモットーに子どもたちに夢をあきらめないことの大切さを伝える、熱血スポーツ塾主宰。教師を退職し、10年かけて自分の夢を実現させた青年海外協力隊・ウガンダ野球隊員。27歳という若さでありながら、MC・モデル・講師・スポーツ新聞ライター・大学講師・ミュージシャンと、様々な分野で活躍するパワフルな女性。他、全22名。一人6ページのスペースで綴られる文からは、それぞれの熱い思いがじわじわと伝わってくる。

この本は、私に諦めないことの大切さを教えてくれた。はじめから上手にいく人なんていない。失敗して挫折して、そこから努力して立ち上がって成功を得るのだ。目の前の現実から逃げてばかりでは何も始まらないし、状況は悪くなるばかり。楽な道を選び自分を苦しめるより、辛くても自分を成長させていける道を選ぼう。22人それぞれの話を読み、それぞれが違う言葉でそう語りかけてくれているように感じた。

彼らは皆、北海道にゆかりのある人々だ。正直、私が名前を見知っていたのはごく少数の方であったが、皆それぞれの方面で努力していることに変わりはない。身近な土地で、こんなにすごい人がいるのかと思うと、運動して自分のモチベーションも上がってくる。それと同時に、悩んで迷って立ち止まっていた自分の愚かさにも気づくことができた。このことに気付かせてくれた「モチ論」にとっても感謝している。

たくさんのモチベーションが詰まった「モチ論」を読み終えた頃、読者には「頑張りよう」「努力しよう」という、自分を動かすモチベーションが身についていることであろう。

(文化学部日本語・日本文化学科3年 伊藤千枝美)

